

田中順子（著）

患者と治療者の間で —“意味のある作業”の喪失を体験して

はざま

中村 春基

（兵庫県立リハビリテーション中央病院，作業療法士）



読み終えて、コーヒー片手に、あらためて表紙を眺めながら、書評に向き合っています。

『患者と治療者の間で』というタイトルで田中順子氏（以下、順子さんと呼ばさせていただきます）は、何を伝えたかったのか？ 264 頁からなる本文，102 編に及ぶ文献リスト，OT である順子さん，シェーグレン症候群，関節リウマチでの 10 年間の闘病生活から生まれた，当事者からのメッセージ，障害受容，語ること等々，順子さんの綴った多くの言葉は，読み手に，心の深くまでしみわたるかのようです。良い本が出たと心から思います。多くの人に読んでもらい，この本で綴られた思いを，多くの人が語り合い，順子さんの挑戦を次につなげていただけたら，順子さんとも幸せだろうと思います。

そんなことを考えながら，本書の特徴をどのようにしたら伝えられるのかを考えているとき，以下のようなアイデアが浮びました。

「どこかの TV 局で本著をもとにドキュメンタリーを作製してくれないだろうか」というものです。順子さんは，本書が初めての書籍とのことですが，どの文章も「視覚化」，「イメージ」ができ，読み手に，自分のこととして伝わってきます。ですから，前述のアイデアが思い浮かんだのだと思います。

タイトルとしては……1 つ目の切り口は，「10 年間の闘病生活を通じて—これでいいのか日本の医療関係者の対応」といったタイト

ルでどうでしょうか。

2 つ目の切り口は，「障害受容という，取扱注意言葉—I'm OK」。

3 つ目の切り口は，「障害からの自由—障害を芸術に変えた人たち」。

起承転結があり，苦労，社会的問題，出会い，自己の努力，障害受容という配慮に欠ける言葉，自己変革，将来へのメッセージ等が含まれており，きっと素晴らしい出来栄えになると思います。

この書評をきっかけに，本書を読まれる方は，ぜひ，順子さんのドキュメンタリーの脚本家にでもなったつもりでお読みください。そのことにより，より，順子さんの苦労の体験を，自分のこととして咀嚼し，257 頁からの「語りを終えるにあたって」で述べられる 4 つのお願いの意味が増すものと思います。以下，その要点をご紹介します。

「最後に，患者の私から医療者の私に特にいたかったことは何だったのかについて振り返ってみたいと思います。（中略）一つ目は，患者の情緒的苦悩に対して手を差し伸べてほしいということです。これは少なくともまだ医療の問題としては未解決の課題ではないでしょうか。（エピソードの紹介があります）。

二つ目は，当事者感覚を育ててほしいということです。（中略）実際にその患者になったつもりで表情や話し方や姿勢をまねしてみると効果的だと思います。（中略）また，当事者の手記をたくさん読むことことは，当事者感覚を身に

つける必須項目としてお勧めします。

三つ目は，自分の存在を肯定してほしいということです。（中略）障害や病によって生産的なことができなくなったり役割がもてなくなった患者は，もっと自分について情けない悔しい思いをしています。「I'm OK」がぐらついていきます。だからこそ，医療者は自分の存在をすっぱり丸ごと愛おしんでほしいのです。（中略）本当をいえば，病院こそが弱さと弱さが共棲し，認め合う場所であるべきなのだと思います。（中略）

四つ目は，「障害受容」という言葉には，忘れずに取扱注意というラベルを貼っておいてほしいということです。（中略）

私自身，「障害受容」という言葉に対して，違和感をもっていた 1 人ですが，順子さんが「体験」と「語り」を通して，「障害受容」を真正面からとらえ，文献的な考察を行い，方向性を示したことは大きな業績だと思います。そのような意味においても，本書は臨床家や教育者，研究者にとって示唆に富む良著であり，ぜひ，多くの方々に読んでいただきたいと思っています。

最後に，順子さん，これからも，順子さんらしく生き，その様子を「語り」，皆に紹介してください。第 2 弾をお待ちしております。

〔 四六判 272 頁 2,400 円 + 税 〕
三輪書店 刊
☎ 03-3816-7796